

ほど 教育センター通信

ほど 火床の火の心を紡ぐ

第5号（通算55号）
平成30年9月20日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター 発行



第三中学校 体育祭 閉会式 結果発表 9月2日(日)

「温かい声かけ」が子ども一人一人の心を育てる

教育センター統括指導主事 土佐 和久

昨年度の小中一貫教育点検評価アンケートのある項目で、次のような結果が出ています。（この項目では、同じような傾向が毎年見られています。）

【教職員】保護者や地域の人たちに、子どもたちへの声かけを促しているか。

・・・肯定的評価 84.4%

【児童生徒】地域の人と一緒に活動を行う中で、ほめられたり、感謝されたりしたことがあるか。

・・・肯定的評価 56.9%

この結果から、次の2つのことが見えてくるのではないのでしょうか。

○大人は声をかけているつもりでも、一人一人の子どもにとっては、声をかけられたという認識は十分ではない。

○子どもたちは、大人からの声かけをもっと欲している。

私には、以前に勤めた学校で気になる子（A子さん）がいました。私はA子さんに廊下で会う時に、「この前の〇〇がんばっていたね。」「ノートよく書かれていたよ。」など、声をかけることを大切にしました。声をかけても反応は無表情でうなずく程度だったので、声をかけない方がよいのかと不安になりました。しかし、卒業の前になってA子さんは私に手紙をくれました。「声をかけてくれてうれしかった。」という内容でした。私はその時に、「声かけの大切さ」「声が届いていたうれしさ」を感じるとともに、「もっと声をかけられたのではないか」という後悔の気持ちになったことを覚えています。子どもたちは、「態度には表さなくても、声をかけられることを待っている」のです。

さて、各学園では様々な特色あるすばらしい交流活動が行われています。その際に、「異校種の子どもたち、他校の子どもたちにも声をかけているのでしょうか。」「保護者や地域の方にも、声かけの大切さを伝えているのでしょうか。」「自校ではどうでしょうか。目立たない子どもにも声をかけているのでしょうか。」自分自身の反省も含め、そんな課題意識を改めて感じています。交流活動は、同じ空間にいるだけでは効果はありません。交流活動の中での「大人の温かい声かけ」が、子ども一人一人の心に（少しかもしれませんが）エネルギーを与えます。そのエネルギーの積み重ねが、子どもの自信と意欲につながっていきます。私たちの心がけ一つで、子どもたちの心を育てていけると考えます。

第5回セーフティアドベンチャー(防災キャンプ in 三条)

今年のセーフティアドベンチャーは、第二中学校で行いました。一ノ木戸小学校 5, 6 年生が 38 人、第二中学校 1 年生が 9 人の計 47 人の皆さんが参加しました。

今回で 5 回目となった防災キャンプは、大切にしてきた『相互の防災、弱い人を守るだけの防災、哀れみの防災ではいけない』『自助の防災 共助の防災の二本柱が大事』という基本的な方向の下、過去 4 回の反省を踏まえて、群馬大学大学院の金井昌信准教授のご指導のもとに、「避難所体験の設定をもっとリアルに」「『体験多くして、学びなし』からの変化」をねらって行いました。

水害が発生しそうな状況を想定して豪雨体験からスタート。そして水流体験、グループディスカッションなど、あえて「その時どうする？」というねらいから、ほとんどの内容が子どもたちに事前に知らされない形で進みました。

連日の猛暑で宿泊ができなかったのが残念でしたが、参加者は無事全日程を終えて、笑顔で修了証をもらっていました。



全活動を終えた児童生徒に修了証を授与

第 14 回わくわく科学フェスティバルに約 800 人来場

昨年度、台風のため中止となった「わくわく科学フェスティバル」を、8月8日(水)、栄体育館を会場に開催しました。今年度は全部で 19 のブースが出展し、来場者は約 800 人でした。来場者の感想を紹介します。

- ・ いろんなコーナーがあって楽しかったし、はじめてきた科学フェスティバルですがとても楽しかったです。また、来たいです。(小学校 1, 2, 3 年)
- ・ 最初は難しいと思ったけど、実際にやってみたら簡単でした。来年また来たいです。(小学校 4, 5, 6 年)
- ・ どれもレベルが高く面白かった。来年も来たい。(中学生・高校生)
- ・ 孫と一緒に来ました。大人も楽しめるものがあり良かった。対応もよかったです。(保護者)

長く続いてきたイベントですが、多くの来場者から肯定的評価をいただき、「また、来たい。」と言っていただけのことにはありがたいことだと思います。今後も、おいでいただいた方々に、科学にふれて、親しんでもらえるようなフェスティバルにしていきたいと考えています。

「3D 立体宇宙シアター」「スーパーボールづくり」「-196℃の世界」「両面ジグソーパズル」「かさぶくろロケット」など、新しい内容のブースもたくさん出展され、訪れた子どもたちはものづくりや科学の体験活動を楽しんでいました。



星座早見盤



ミニ建設機械



空気ロケット



耐震建築模型

第1回防災教育授業研修会 9月7日(金)

今年度は三条学園の3校を重点取組校に指定し、防災教育の取組を推進していただいています。上林小学校で開催された今回の研修会には、各校から計40名の教職員の方からご参加いただきました。全クラスで洪水災害に関する授業が行われ、その後に開催された全体会において授業で学んだことについて6年生の代表児童が発表しました。



この全体会では、穴澤久美子研究主任が自校の防災教育の取組を説明し、その後、群馬大学大学院の金井昌信准教授から「学校・家庭・地域が連携した防災教育の可能性」という演題でご講演をいただきました。

市内各校において防災教育を推進いただいております。引き続き充実したお取組をお願いいたします。

次回の研修会は11月13日(火)に第三中学校で開催されます。

学園の取組紹介

あいさつ運動



西鱈田小学校

瑞穂学園（西鱈田小学校）

9月6日(木)、本成寺中学校の生徒会の代表生徒が、「瑞穂学園」と記載された新しいのぼりを掲げて児童の登校を迎えました。この日は、西鱈田小学校で瑞穂学園の児童生徒のさわやかなあいさつが飛び交いました。

前日には月岡小学校でも同様に実施されました。

四つ葉学園（保内小学校）

四つ葉学園では、9月12日(水)から18日(火)までの4日間、第四中学校の生徒がそれぞれ自分の卒業した学校で、あいさつ運動を実施しました。

登校した児童は「おはようございます！」の元気な声とともに、中学生や中学校の先生とハイタッチをしていました。



保内小学校

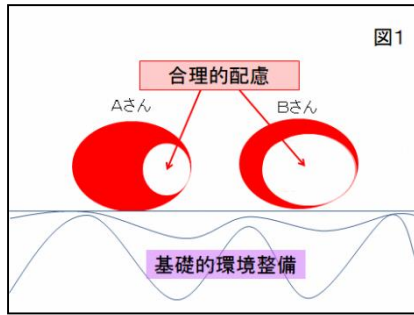
合理的配慮と基礎的環境整備を確認しましょう。

小中一貫教育推進課 指導主事 生方 清司

1 合理的配慮と基礎的環境整備

合理的配慮と基礎的環境整備について図1で説明します。

卵の形をしたものが子どもたち。学校の中をくるくる回りながら学習したり生活したりしているとイメージしてください。白く欠けているところがうまくいかなかったり困難だったりするところです。Aさん、Bさんそれぞれのうまくいかなさがあり、その大きさも形も違います。うまくいかなさを完全に埋めることができればいいのですが、それは難しいので、できる範囲で相談しながら配慮し対応します。



Aさんへの配慮はBさんにはフィットしない（同じ大きさや形ではない）ので、Bさん専用の配慮を相談の上行います。

それぞれのうまくいかなさに合わせた配慮、言ってみればオーダーメイドです。一人一人違うわけです。これを「合理的配慮」といいます。

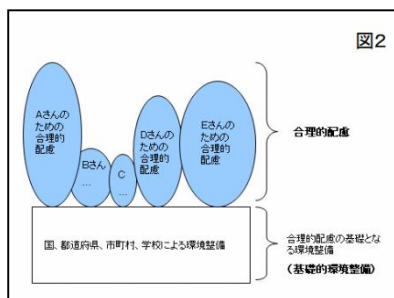
次に、AさんやBさんは、学校の中で回転しながら学習したり生活したりするわけですが、一番下の大きく波打った床（環境）の中では動き回るのには難しいです。下から2番目だとだいぶいいです。理想は平らな床（環境）ではないでしょうか。

このように、Aさんにとっても、Bさんにとっても学びやすい、生活しやすい環境にすることを「基礎的環境整備」といいます。

2 合理的配慮と基礎的環境整備の関係

合理的配慮と基礎的環境整備の関係については図2で説明します。

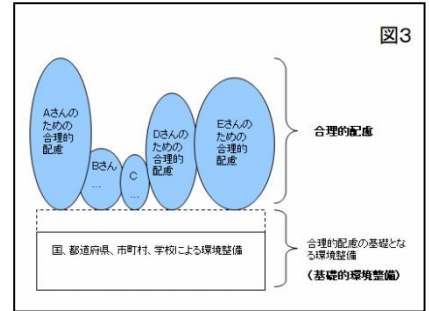
国や県、市町村、学校による環境整備が「基礎的環境整備」です。これをベースとしてAさんのための合理的配慮があり、Bさんの合理的配慮があり、Cさん、Dさん、Eさん



の合理的配慮を提供します。

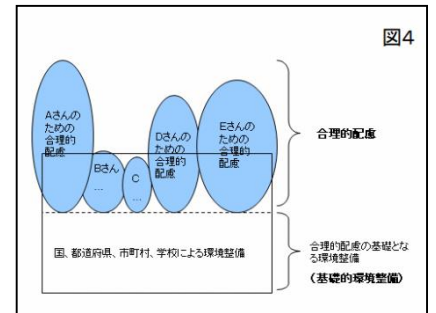
合理的配慮は、それぞれの人に合わせたものなので、大きさも形も異なります。

もし、基礎的環境整備が進んでいない学校であれば（図3参照）、ベースとなる基礎的環境整備が低い状態であり、同じ教育



を提供しようとすれば、合理的配慮を大きくしなければならぬでしょう。

逆に、基礎的環境整備が充実している学校であれば（図4参照）、合理的配慮が基礎的環境整備に



含まれてしまうので、小さい合理的配慮で同じ教育が提供できます。このこと

を言い替えると、基礎的環境整備が進んでいる学校では合理的配慮を提供する際の負担が小さくて済むということになります。

3 合理的配慮と基礎的環境整備の具体例

補聴器を付けているお子さんがいて、教室では雑音が多く補聴器がその雑音を拾ってしまい聞き取りづらい状況でした。そのお子さんが聞き取りやすくするための「合理的配慮」で、学級の机と椅子の脚にテニスボールをはめました。雑音は減り、聞き取りやすくなりました。それだけではなく、学級全体が静かになり学習中の私語も減らすことができ、学級の子どもたちにとっても学習しやすい環境になりました。「合理的配慮」として取り組んだことが、「基礎的環境整備」になっていると言えます。

「合理的配慮」は、対象となる子どもの状態に応じて変わっていくものであり、技術の進歩や人々の意識の変化によっても変わっていくものと考えられます。関係者による丁寧な相談が欠かせません。